

レーザーとスポーツを融合させ可能性確立へ

日本レーザー・スポーツ医学科学学会学術集会

「近代オリンピックを
考える」を講演する同
学会植田史生会長

「日本レーザー・スポーツ医学科学学会学術集会」（会長＝慶大体育研究所前所長・植田史生氏）が7日、横浜市の慶大日吉キャンパスで行われた。東京五輪も決まり、スポーツ医学の重要性が今後クローズアップされる中、レーザー医学とスポーツ医学の融合を目指す学会として注目を浴びている。

植田会長が講演

第17回を迎える「日本レーザー・スポーツ医学科学学会学術集会」は、一般発表と研究リポート、植田会長の講演に加え、日本水泳連盟前シンクロナイズメント委員長の金子正子氏による特別講演会で構成された。



レーザーによる弱い生体反応を利用した治療のスポーツ科学における有効性を模索し、来る東京五輪に向けて、今後も活発な活動を目指していくと報告された。

本学会を設立し、レーザー治療を実際の医学の世界で実施している形成外科医の久保田潤一郎博士（写真）によると、一般的にレーザー光による治療は約40年前から行われ、各種病変の治療に生かされてきたが、最近では弱いレベルでのレーザー光

治療が活発に行われているという。



レーザー治療は波長の特異性を生かして正常な組織を温存し、異常な部分のみを治療するというもの。スポーツの現場では主に痛みの軽減、疲労回復、運動機能の向上などに応用が試みられ、臨床的な結果も得られているが、日本ではまだ広まっていないのが現状という。久保田氏は「すばらしいレーザー療法があるので、スポーツの現場で活用できれば、アスリートのケガや健康管理に活用できるのです」とスポーツ界へ向けた将来性に期待すると話した。

また、日本で初めてレーザー治療を行った都内にある大城クリニック理事長・大城俊夫博士は「レーザー治療はむち打ちや腰痛、アザや傷痕を回復するための有効な治療法として取り入れられています。同じ光である太陽光でも寒い日に浴びると、体に光熱反応が起きて温かくなりま

す。レーザー光にしても太陽光でも、光には無限の可能性があるわけです」とわかりやすく説明してくれた。

植田会長は「スポーツ医学の世界ではレーザー光の効果はまだ立証できていません。この学会で少しでもレーザーとスポーツを融合させて、可能性を確立していきたいと思えます」と締めくくった。



前シンクロナイズメント委員長の金子正子氏特別講演

特別講演では、長年日本のシンクロナイズドスイミング界をけん引してきた、日本水泳連盟監事・前シンクロナイズメント委員長の金子正子氏（写真）が弁を振るった。「指導者の役割、シンクロナイズドスイミングの選手を育成してきた」と銘打った講演会では、シンクロナイズメントの正式種目になった1984年のロサンゼルス五輪から2008年の北京五輪まで7大会連続メダルを獲得した苦労や、教え子である小谷実可子さんと鈴木絵美子さん、原田早穂さんと二人三脚でメダルへの執念を燃やした日々のごなど興味深い話が満載だった。また、スポーツ現場での体罰問題にも触れ、「手を出すコーチは言葉が足りないと思う。自らも真剣さや一生懸命さを持つて、きつと子供たちの心にも響いてくるのではないのでしょうか」と提言した。コーチの仕事は「選手に魂を注ぎこむこと」と話す金子氏。指導者は自分の使命に覚悟と執念を持って育成してほしいと自らの経験からアドバイスを送っていた。